

無限ポエトリー

MUGEN
POETRY

6

特集●萩原朔太郎

岡庭昇／菅谷規矩雄／神保光太郎 他

島田謹二〈源氏物語〉入門

純粋詩誌●別冊無限

詩 西脇順三郎／草野心平／宗左近 他

昭和五十四年七月一日発行（第6号）

無限ポエトリー

MUGEN POETRY

特集●萩原朔太郎

TOYOTA

国産ディーゼル乗用車初の
オートマチックにご注目^{（一部寒冷地を除く）}。

新登場のスーパーデラックスに採用。
しかも、静かで経済的なオーバード
ライブ付です。そして、軽い操舵力
のパワーステアリングも標準装備。

入念な静粛設計により
快適な居住空間を実現。

騒音の低減を実現する国産ディー
ゼル初のタイミングベルトを採用する
ほか、入念な防音・防振設計により、
いちだんと静粛性を高めています。

高速ツーリングにもゆとり。
先進のメカニズムを採用。

高回転域でのハイパワーを実現する
オーバースクエア設計と、国産ディー
ゼル初のOHCエンジンの採用によ
り、卓越した高速性能を発揮します。

20.0km/ℓの燃費^{（60km/h定地走行テスト）}。
わずかな維持費も大きな魅力。

高回転域でも的確に燃料を供給する
ボッシュ式分配型燃料噴射ポンプな
どの採用で低燃費を実現。また数々
の耐久設計で、維持費の安さも魅力。

クラウン・ディーゼルに、先進の技術で豊かさを包んだ
格調のスーパーデラックス誕生。

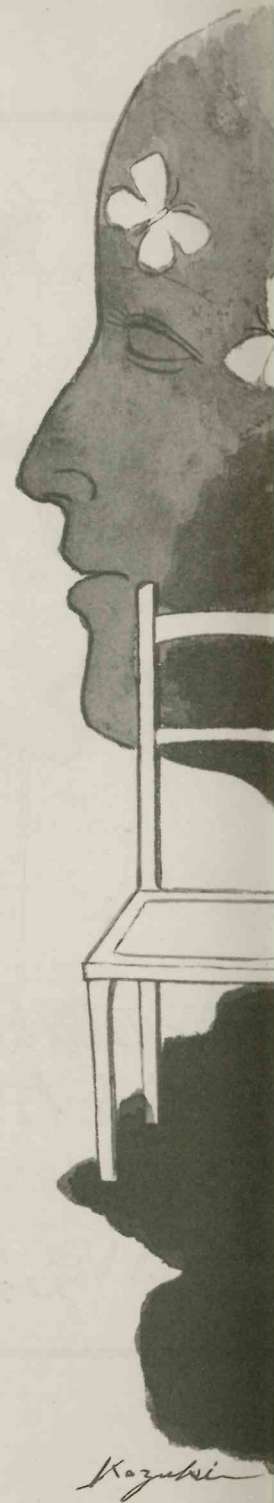
わずかな維持費。静かな乗り心地。



新型クラウン
ディーゼル2200

写真はディーゼル2200スーパーデラックス
●全長4690mm ●全幅1690mm ●全高1440mm ●エンジン4気筒OHC・72馬力





萩原朔太郎特集①

近代と朔太郎 岡庭 昇 56

詩のリズム 菅谷規矩雄 64

言葉のリズム

—— 朔太郎の思い出 ——

かなしき五月 神保光太郎 70 津久井幸子さんのこと 久保忠夫 74

朔太郎の思い出 斉藤総彦 71 朔太郎先生の思い出 田中克己 76

朔太郎放談 嶋岡晨×大野純 78

「源氏物語」入門 島田 謹二 25

連載① 詩の極点とは何か 木原 孝一 104

立 原 道 造 郷原 宏 116

詩 と 絵 画 南川 周三 123

のり巻パーティー

普及会

かなしき五月

神保光太郎

ず……」と書いてある。そして、そのメモ帳を繰って行くと、六月の初めに、

朔太郎逝き 晶子去り 惣之助倒る かなしき五月

とも記してあった。

萩原朔太郎は千九百四十二年五月二日になくなっていくが、それから、十日余りを経て、五月十五日には佐藤惣之助、さらに、五月二十九日に与謝野晶子、そして、この同じ年の十一月二日には北原白秋が死去している。これらの詩人達は言い合わせたように、相携えて、永遠の訣別を告げて去ったようにも思われる。ところで、この年の私自身の場合も、死を想いめぐらざるを得なかった毎日であった。当時、私は太平洋戦争の現場であるシンガポールにいたのである。軍の絶対命令の下に、文化芸術や新聞関係の人達が集められて宣撫班の名目の集団がつくりあげられ、私もその中の一員として、否応なしに、貨物船に乗せられて、戦地へと送りこまれたのであった。この部隊に課せられた仕事は、直接に武器を取るのではなく、占領地の住民の中

に入って交わりを深めて行くといったところにあったようである。ところで、私達は日本軍が占領した直後のシンガポールに上陸したものの、何をやるべきなのか戸惑いを感じないわけにはいかなかった。そうした折に、現地の住民の間に、新しい支配者である日本の言葉を知らしめたいとする気運が高まってきたのであった。それで、軍はこれに応えて、日本語の学校をつくることとなり、私達にその設営を委任したのであった。しかも、その学校を主宰する校長なるものを、ひとまあるうに私が選ばれたのである。それから私の忙しかったこと、全く、夢のような毎日であった。くろき子ら あかき髪の毛 われここに校長となる 夢の如きか

朔太郎と私が最後に会ったのはいつであったろうか、もう、私の記憶にはないが、彼はその晩年、健康がすぐれず病床に臥しているような日が多かったようにも思われる。私はさいわい、生きて戦場から故国に帰ることができたが、彼はもういなかった。今、私がこれまで彼について書いたさまざまなエッセーや、また、彼といっしょだった日の写真などに接しながら、あらためて、在りし日の萩原朔太郎の姿を思い浮かべている。若き日の彼が追われるように逃げたふるさと前橋に、迎えられた日、私は保田与重郎君と共に、彼に付きそって行ったが、あの日のうれしそうな彼の表情は今も鮮かである。また、この頃、若い人達の間に傳説のように語られているともきく彼が生涯でも稀な詩の朗読のこと、これは、私の結婚を祝って集まった夜のできごとであったが、そこに居合わせた人には、朔太郎の他に、高村光太郎、佐藤春夫をはじめ、堀辰雄、亀井勝一郎、丸山薫、津村信

夫、立原道造等々。そして、その人達はまだ若いのである。私は、今の自分の年齢が、こうした人達が去って行った時のそれを越えているのをあらためて思い知らされる感じでもある。それでは、私にもやがて訪れるであろう朔太郎初め、これらの人達との再会を期待して筆を措こう。

一九四二年シンガポールにて

昭和五十四年二月

朔太郎の思い出

斉藤総彦

かがよへる

かがよへる 雲間をぬひつ あま馳けり 空を奔りつ あでびとの 宮居いづこと きみ 今も探ねあかすかくさぐさの 詩文の束 かなしくもこの世にとどめ きみ 今は 御魂となりて 五月 閏 清らの旅ぞ みんなみの 浜辺に立ちて 北の鳥 おとなふ待ちつ 在りし日の みすがたうかべ 生ける身の 不思議をおもふ

反歌

朔太郎 北に死す われみんなに
いまだ 生きてありしか

▽ グルメの先生

前橋の繁華街中心部に「新昇ビヤホール」というレストランがあった。名前はビヤホールだがどうして銀座あたりでも恥かしくない立派なフランス料理を出し、一階は四人掛けテーブル十数席、2Fはパーティは勿論正式な宴会の出来るよい店だった。此処が萩原先生（お恥かしい話だが、初め私は萩原さんとか、朔さんと呼んでいたところ、先輩の角田恒（詩人・歌人）に、総ちゃん先生と呼ばなきア駄目だよって叱られ、以来そのようにしたのである。）の巣であつて、且つ私の巣でもあった。この店のマスターというのが田中章二さんといって何ともハイカラさん、近代センスの持ち主。従って先生に傾注し大の崇拜者であつたし、私のオッチョコチョイ振り

が気に入って頗る可愛いがってもらったものである。街に灯がともる頃になると私はデックとしていられないタチなのでぶらぶらウォーキング、かくて新昇ホールの部厚いドアを押す。と隅っこテーブルにむつちり、黙ってお銚子一本立て、サロインステーキにナイフを入れて、先生が目に入る。先生は大へんな喰いしん坊、大へんなグルメなのである。その日の気分によってステーキはレアだったりミリアムだったりするが、これを、顔色を見て、マスター自分で鍋を握る。しかも次の注文は何かまでちゃんと確っているんだから驚く。ヌウッとして来た私の顔を見るや田中さん、目くばせで「どうぞ」。こつちも馴れたものでマスターの目につれてサッとコック場に入っていく。コック場の出入り自由

は許されていた。

グラタンの造り方、スパゲティやマカロニの茹で方、フライのコツ、特にオムレツなど鍋返し迄念入りに修業させられた。洋食は田中マスター。音楽(特にプレクトラム楽器)は先生。その頃お弟子さんは私丈で、弟子入りを頼む人があっても私の処へ廻されたのである。このように夫々エキスパートに直伝を受けた私ってほんとに幸運児だった。さて、田中さん「斎藤さん先生は今度はチキンコキールです、サアソースを作って下さい、お出しするときはパセリの微じんとスパイスはオレガノをちょっと振って」。出来あがつた熱々をわざと私が持って「お待ち遠うさま」、ひょいと私を、コキールのポットを見るとニヤツとして、「またまたやったの、馬鹿だナア、馬鹿だナア(これは御気嫌上々の時、お得意のセリフ)。さて後の話になるが、私が先生のお宅(石川町)から2、3軒の処にある十畳、三畳二タ間の離れ家を借りて同居した時、十畳の片隅に先生の机、反対側に私の机を置き、これ

は静かな日本間調。三畳は洋風キッチンとしたのであった。当時まだ珍しかったアメリカ製の石油コンロ、これはたしか先生と二人で舶来のカタログを首つき合わせて調べ、横浜の代理店から取り寄せたと覚えてる(記念に今でも持っている)。フライパンから皿、

コーヒースセットなど調理道具一式揃え、三畳にはグリーンのカーテンを吊し、壁にはギリシャ教会のイコノナや、その頃新傾向のマボの絵などぶら下げてガラリと気分を変えたりした。ひょっこりやって来た萩原友明君(恭二郎の舎弟)はこの二人の室を見て曰く「何!これ、ハイカラ朝太郎八幡の蔵にハイカラ狐と同居す」。でも先生は御満悦であった。さいさん(先生は私のことをさいさんとか、フサちゃんと呼んだり)、スパゲティ喰べヨウカとかオムレツ焼いてくれる!?と御注文がある。こんな時田中マスター直伝がお役にたつ。因に日本風の広い部屋は昼は先生原稿書きで夜は自宅へ、私は其処を寝ぐらとしたのだが、憶病な私には夜の離れ家のうす気味悪さ、付近には大きな森に囲まれた立派な寺院があり、ふくろうの声、月に吠える犬の声が狐に聞えるという始末。が、うつかり夜は怖いなんて云おうものなら馬鹿だナ

アをやられるので黙っていたがそれだけ印象が深い。(その頃離れに裏庭つたいお茶やクッキーを運んで下さったお母さんにおんぶされ、お父さんゆずりのお目メをキョロつかせていた可愛いお嬢ちゃんが今の萩原葉子先生である)。

▽ おしゃれ 先生

たしかに先生はベストドレッシングだった。殊に私というおしゃれ好きの相手が出来て、当時の誌名「ヴォガン・ボーク」と云ったと思う洋雑誌をとったりして色々なデザインやアイディアの研究をしたものだ。大正時代の前橋では、散歩好きの先生が町を歩かれると振り返る人が多かった。といつてもそれ程突飛な服装をしてらしたわけではないのだが、それがどこか違っていたのである。先生の詩集などに載っている肖像写真を見られれば、ハイカラぶりが判って貰えると思う。大阪に旅行された折「これヤツタンさい」(して御覧なさい)と土産に持って来て下さったのがリボンタイであった。正直な話その頃18ミリ幅のネクタイなんて見たこともなかった。よくも目に付いたものだし、第一物好きな私がきつと嬉ぶであらうというきめ細い

人情味に何とも感激したものである。

しかも結び方まで手を取って教えて下さるのだから。ある日のこと、部厚いボワツとした新調のオーバーを着てらして、「どう!?」とおっしゃる。モスクワ辺りで見えるルスキイの感じ。それ丈ではない、びっくりしたものはその襟なので、今なら誰も驚かないがヘチマ襟。御婦人のコート、タキシードなら何でも構わないのだが。これが御自分のデザイン、いかにも先生らしい。恐れ入りましたがそれからが大変、と申すのは近く先生が東京に出られることになって居り、上毛マンドリンクラブで送別演奏会を催すことがきまっていた。これがからみで先生はいきなり「さいさん、コンサートのモニングを作りなさい」と来たものだ。こちらは目を白黒だ。「あんたのため

に違いないが、上着からベストまで黒リボンでふち取りがしてある。試着して見ると何と、これが細身の私にバツチリときまって、とってもシックな感じ。どんなパーティーに着ていったってバリツとしたものだ。やれやれである。先生は先生で得意のニヤリ。いよいよ萩原朝太郎送別大演奏会、会場柳座劇場。

プログラムはマンドリンオルケストラ、クラブのハーマニカバンド、間に独奏と組立は方式通り。総員五十余名。指揮萩原、トップ奏者を記しておく、第一マンドリン角田、第二マンドリン根岸、マンドラ、バンデョウ斎藤、ギター宮崎、セロ曽我、ウクレレ、ドラム、トライアングル、シロホンなど当時としては本格的な編成であった。プログラムの中心で指揮台を下りた先生が、紅白のリボンのついた指揮棒を跡継ぎとして私に渡して下さる、これを受けて私が指揮台に、「萩原朝太郎先生に捧げる曲」(絵彦編曲)チャチャーンと最初のひと振り。リボンぶちのモニングがひらり格向いい。その後仲間で有名になったのが、

辞令

斎藤 総彦

上毛マンドリンクラブ事務に關係する

全権を右の者に委任す

会長 萩原朝太郎 印

あんな事書いて、馬鹿だナア、先生笑っていらつしやるでしょうね。

▽ 思い出はきりもない

映画に洋画好き、アドルフ・マンデュウ、マーナロイ、チャップリンのファン。先生と私もひとり本屋の宮崎進ちゃんとのトライアングル(スクリーンアートという小雑誌を出したりした)。私の作った宣伝映画への肩入れ。

ダンスにこれは天下一品、機会あれば又。ギャルブル、特に四光五光の花合せ。鼻をチョンとはじいて今晩如何は仲間の合図。

オペラ、映画見物、うまいものアサリの浅草巡り。

一流音楽家演奏会へのインヴィテーション。マンドリン、リュートなどの、特にカラ・イチエ演奏会場帝国ホテルでのお上りさん大爆笑。

手品に特にお得意が四ツ玉奇術、手品ではお師匠さん格だった私をうならせたあざやかさ。もつとも初めは玉をボロリなんぞもあつたが。

独特な音楽教授振りⅡ調子のとり方のユニークさ。秘蔵のカタニヤのマンドリン、ギターへの愛撫ぶり。それが私がハワイから求めて来たウクレレを見ると、ちょっと借してと教則本ごとに取り上げてボロンチャッチャ。その熱心さに、それ先生使って下さいって申し上げると、そのうれしそうな顔で、「ならさいさんこれ上げる、ものにしないさい」なんとバンデョウを下さったのである。それに先生が東京に行かれる時、あの愛用のカタニアギターを使って、と下さった。この二つの楽器は我が家の宝。

ジャズの導入Ⅱこれはもつと早く書くべきだったが、ジャズをマンドリン合奏に入れたことである。その第一番目の編曲が鴨緑江、「支那と境のアノ鴨緑江」だったからその天衣無縫ぶりに全く驚くし、それがちゃんとジャズになっていたんだからあきれ返ったりもした。ジャズそのものが珍らしかったのだから。思えば 思えばなつかしい。

パリに行きたがっていた先生、前に

も何かに書いたが、先年パリに行った時セーヌの河岸に腰を下ろし、メモを裂いて「先生パリですよ セーヌですよ」と書きソツと河に流して めい目した。

津久井幸子さんのこと 久保忠夫

昭和五十三年四月六日、津久井幸子さんがなくなられた。

正午近くに長男の逸郎さんの奥さんから電話で知らされた。折あしくわたしはギックラ腰で臥っていた。電話は家内がお受けた。容態は月に一度位伺っていたので、この日の来るのを予期しないではなかったが、なくなれたと告げられて、目頭のあつくなるのを覚えた。

空は荒模様であった。寝返りも出来ずに、その空の一点を窓ガラス越しに見つめながら、「今からならお通夜にも間にあうのに」と、動けぬわが身がうらめしかった。うらめしさはやがてあきらめに変り、さまざまの思ひ出がつきつきに浮んで来た。

津久井さんにはじめてお目にかかったのは昭和二十七年四月六日のことであった。春休

こんな処でも思い出す朔太郎。あの大詩人萩原朔太郎の思うようなブライベントライフ、思えば 思えば なつかしい。

みで帰省中のわたしは当時群馬県民政部長であった石川薫氏の紹介状をもっておたずねした。わたしの大学の三年のときのことである。

空はどんよりとしていて、底冷えのする日であった。玄関に立って案内をこいながら、室生犀星も、北原白秋も、若山牧水も、やはりここにこうして立ったのであろうか、と思ったりした。応対に出られたのは逸郎さんであった。来意をつげ、紹介状をおわたしすると、紹介状に目を通され、すぐにお母さんをおよんで下さった。

何よりも気品を感じた。中野重治が「妄想」に「背の高い、一種特別な美しい容貌の婦人」と書いたが、そしてそれからちょうど十年たったのだが、花のおもかげながら、わたしのはじめて受けた印象は「気品」の一語に

つくる。

離れの床の間には村上鬼城の「花散るや耳ふつて馬のおとなしき」の半折がかけてあった。わたしはそれを炬燵に膝だけ入れて、端坐しながら見た。

そのころのわたしは人見知がはげしく、はじめての家では敵陣へでもものりこんだような緊張をしているのが常であった。そのときも例外ではなかったが、やがて一つの話題をきっかけにして、すっかりその緊張は解け、津久井さんもまるで親類か縁者のように親しみを示して下さった。

わたしの在所は群馬県の藤岡である。「藤岡なら、藤川という料理屋さんがあったのをご存知ではありませんか？」と、なつかしさをこめての問いであった。「藤川」なら、ここが「藤川」の跡だという場所も子供のときから知っていたし、近所に「藤川」の親戚の家があって、その家の二階の欄間に田中義一大将の扁額があるのも知っていたので、「はい」と答えると、「そうですねですか」といかにもうれしそうに笑われた。

津久井さんと藤川ふみさんとは、明治の四十年代に、そのころただ一つの県立女学校であった高崎高等女学校で大の仲好しであったそうである。津久井さんはわたしに藤川ふみさんについてききおよんでいることをあれこれお話すると、いちいち「そうですね」「そうですか」とうなづきながら、きいておられた。津久井さんは、そのとき、短かった「娘時代」をなつかしみ、いとほしんでいられたにちがいない。

おそらく、朔太郎研究をころざして、津久井さんをおたずねしたのは、わたしなどが一番早い方ではなかったか、と思う。それだけに話は新鮮であった。それはきいていてわかる。その新鮮なお話を、はじめてお目にかかった日から、ふんだんにきかせていただいた。それらは頂戴してある書簡とともに、逸郎さん、二男の公平さんとも相談して、いずれままとめたいと思っている。

その日、帰りがけにわたしを動揺させるようなことが起った。たちかたわたしに、かたはらの押入からとり出して、「先日、物置からこんなものが出て来ました」といって、一くくりのノートを示された。何気なく見ると、「竹」の草稿ではないか。わあっとでも

叫びたいような感動であった。口ばやに、それが何であり、どれほど大切なものであるかを説明したが、それはたぶん熱気をおびた一連のことばでしかなく、説明にも解説にもなっていないかった、と思ふ。

おどろきはこれで終らなかつた。「習作集 第八巻」の出現である。とくに、啄木の模倣、「郷土望景詩」との関連を思わせる短歌に興奮した。それで、これらノートの調査をひきつづきさせていただく承諾をえて、その日は辞し、翌日から、四里の道をバスにゆられながら津久井邸にかよった。いろいろの発見があった。いまその一つにかかわることを記しておこう。

「習作集 第八巻」に歌集『空いろの花』の序詩が収められている。この歌集が津久井邸から出てこないものか、と期待したことは一度や二度ではない。また、「習作集 第八巻」がある以上、八巻以前も、八巻以後もあるのではないかとその出現をまちのそんでいた。待望久しい『空いろの花』が昨年（昭和五十三年）あらわれた。これは最近にないうれしい、ありがたい出来事であった。実物には触れていないが、全集で見て感激した。

ところで、どのようないきさつにしる、出

現し、そして公刊されたことはこの上なく結構なこと、つけ加えるべきことは何もないが、研究ということになれば、どんな道筋で今日に及んだか、せんさくせねばなるまい。

エレナとよばれた女性の側から、というところが劇的で、物語としてはおもしろいが、おそらくそうではなからう。というのは、『習作集 第九巻』というノートは昭和二十八年に出現した。八月十八日づけの「朝日新聞」群馬版は「これは市内立川町青林堂書店萩原正雄さんが昨年暮、故人と親交のあった市内某氏から偶然入手したもの」と報じているが、この「某氏」は知る人ぞ知る人物で、津久井さんもわたしも、書店の主人からその「某氏」が「まだあるが、今度はもっと高い」といったというのを聞いていたからである。もっとも「まだある」といった中に果して『空いろの花』が入るのかどうかきめられないが、『習作集 第八巻』と同第九巻は少なくとも戦後まで、津久井邸の物置と一緒にあったと見るべく、『習作集 第

八巻」にその序詩のある『空いろの花』も同時期のものとして、やはり一緒にあったと考える方が自然であるように思う。

の日に逸郎さんの奥さんから電話があった。こんどはわたしが出られるようになっていた。「お通夜のときは嵐のようだったが、告別式のときにはよいお天気になって、大ぜいの方々が焼香に見えて下さいました」ということであつた。

朔太郎先生の思い出

田中克己

朔太郎先生とは晩年のみじかいおつきあひで、作品も亡くなられてずっと後で驚歎しつつ読んだ。しかし暗誦しているのは「父の墓に詣でて」と題した「わが草木とならん日に」を首とする数行の詩だけである。故三好達治氏は私が朔太郎の詩をよんだことがないという一言に「もうそんな詩人が出て来たのか」とびっくりされた。わたしは春夫をよみ李太郎をよみ、西脇順三郎をよみ、安西冬衛をよんだが、本当に朔太郎をよんだことなくして詩を作った。朔太郎先生もそれを知っていて、「君は僕の弟子ぢやないから先生はよしてくれ」とはつきりいはれた。

つきあひ（昭和一三年から一六年までの三年余）で本当の詩人を知った。厭人的であつた先生も私には遠慮せず、お得意の手品をして見せ、あまりにお下手なので私が笑ふと氣を悪くして二度とお見せにならなかつた。今は「世田谷代田」と名が変つてゐる世田谷中原のお宅へも数度伺つたが、私は物質的にも精神的にも物をもたないでゐた。このことでは咎められなかつたが、新宿の酒場では「君も時には金を払へよ」とはつきりおっしゃつた。わたしはただで先生のよこに坐り「娘が悪い恋愛をしてゐるので」といふ御心配をもち承り、「あそこにいる女はどうだ」ときかれ、「別に」といふと「あれが僕の恋人だ」と仲

居を指され、私が「先生あの人のどこがいいのですか」と驚くと「きこえる、きこえる」とあわてられた。

この二十数年、わたしは詩人としてでなく、教師として小田急に乗って通勤している。二年前やと昔の先生のお宅の辺を探して、空地のままの屋の上がそこだろうと当てずっぽうに解釈して落胆するより思ひ出して悲しくなつた。先生のなくなつた年より、私は既に十歳も年が過ぎてしまつた。葉子さんが多分、先生のおなくなりになつた年になつたのだらう。しかしテレビで見ると先生よりずっとお若い。先生の苦勞性、鋭敏さ、恐怖症など葉子さんには見られないのを、私はテレビで見えて安心した。「過失を父も許せかし」という例の私の暗誦詩の父密蔵先生は前橋一の名医でただ一人の息子を盲可愛がりになすつたのであらう。お母さんはこわくて私の御宅訪問の時

にも「朔！」と次の間から呼びになると、

先生はあわてて立つてゆかれた。私はいまは八尾市になつてゐる木の本の出の名医を、同郷の人として（私の父方は河内の出身である）何でも見えながら朔太郎先生を甘やかされたのだと思ふ。昭和二年、大阪へご先祖の墓詣りにお越しになつた時が、初対面だが、先生は小高根二郎君が私を紹介すると横を向かれた。迂散くさい奴だと思ひになつたのだらうと私は悄然とお話することもなく、翌年からのおつきあいで友人として信用されるなど予想もしなかつた。亡くなられた日に私はシンガポールの新聞社にいて、その日のうちに御逝去を知つて嘆息し、スマトラへはじめて来た内地からの便りで妻がお葬式に出てくれ、そのあと先生から御病状と配給の酒のお札と透谷賞の候補に推したとの長いお手紙をいただいた。シンガポールでもスマトラでもウイスキーは本場ものが山ほどあつて、差上げられないことを私は残念に思つた。朔太郎先生通りの詩人ぶりを發揮して皆から爪は

じきされたことは知る人も多からう。私の部下になつてゐたインド人の青年は私を「実行力がありでないですね」と一言にしていゐた。しかし私は二度の兵役で無能だつたばかりに、無事七十歳にならうとしてゐる。詩はもう作らないが詩人であるその点では確信をもっている。編集部のおいつけでは二月末だつたこの原稿も雪の降つた三月四日の夜になつて書いてゐる。誰か朔太郎先生を語る人はいないか。前橋で二回講演して私の中の朔太郎先生は空っぽになつてしまつた。

「過失を人もゆるせかし」、慶光院さんへの電話、「無限」への電話も通じない。のせてもらわなくても結構である。太宰治と話した人間もだんだん少なくなつて来た。そのうちに私は櫻桃忌に出るつもりであるが、これも果せないかもしれない。「なくてぞ人は恋しかりける」。私の拙筆はこれでお許し下さらばと思ふ。（五月四日午後八時）